

主 題 : 教会とは:大宣教命令に生きる

聖書箇所 : マタイの福音書 28章18-20節

この朝、皆さんと一緒に学びたいみことばは、マタイ28:18-20です。ここ3週にわたって私たちは、教会について、特に教会を支える四つの柱について考えてきました。新年度を間近に控えた今、改めてひとりひとりが心に留めておくべき最も基盤となる要素を、いろいろな聖書箇所から見てきたわけです。

### 【教会に欠かせない四つの柱】

これまでに見てきた三つの柱を思い出してみてください。一つ目に学んだのは「教会は主の栄光のために生きていく」ということでした。教会の中心は私たちではなくて、常に神様でした。神様を礼拝する者として、私たちはいつも主の栄光を見続けながら、主の栄光のためにすべてをなしていくことが大切でした。二つ目に学んだのは「教会は福音に生きていく」ということでした。教会は単に福音を知って、それを信じているだけではありません。その福音の真理に堅く立ち、天に国籍を置く天国民として最後まで忠実に歩いていくことが大切でした。三つ目に学んだのは「教会は大切な戒めに生きていく」ということでした。教会は神様の愛を知った者として、心から神様を愛そうとするだけでなく、同じようにして、自分も受けたその愛でもって隣人にもその愛を喜んで示していくことが大切でした。

ここまでの内容を振り返って、どうだったでしょう。間違いなく皆さんにとって、一度も聞いたことのないようなものではなかったでしょう。むしろ、もう何度も耳にしてきた話だったかと思います。もしだれかに「何のためにすべてのことをなすのですか?」と尋ねられれば、多くの人たちが「神様の栄光のために」と答えるでしょうし、もしだれかが「いつも福音に立って、神様や隣人を愛することは重要なことです。」と言えば、それに反対する人たちもここにはいないでしょう。正しい答えは、みな知識として持っています。でも、正直になれば、正しい答えは知っていたとしても、それを実践するのは難しく感じたり、時には不可能にさえ思えることもあります。私たちは主の栄光のためにすべてをなしていきたいと願っていても、日々罪との戦いを経験し、それに負けてしまうこともあります。福音がもたらしてくれる希望を持って生きていたとしても、生活の中で起こる出来事に心が騒ぎ、不安や恐れに襲われてしまうこともあります。隣人を愛そうとしても、その相手に感謝もされず、逆に苦しめられることもあります。私たち自身が喜んでみことばを実践しようとしても、その心をへこませて、失意を抱かせるような問題は周りにあふれているのです。先週見た「大切な戒め」だけを考えても、自分と違うような人、自分と合わないような人に犠牲を払って愛を示すことには難しさを覚えることがあります。繰り返し兄弟姉妹から傷つけられれば、心を閉ざして「もう私は神様だけを愛して生きていけば大丈夫」と自分に言い聞かせたくなる思いにかられることもあるでしょう。そのような難しさは、実際に存在しています。では、どうすれば私たちは正しい知識を持つだけで終わらず、みことばを生き続けられるのでしょうか?困難の中にあっても変わらずに、私たちの心を突き動かし、私たちの心を動機づけるものは、何なのでしょう?

結局のところ、それは「私たちが持っているキリストへの愛」でした。キリストに対する愛というのは、みことばをただ知っているだけで留まらせるのではなくて、私たちをみことばに従う、というところに導いていくのです。イエス様ご自身もこう言われました。ヨハネ14:15、21に「:15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。……:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。」と。愛するイエス様は、ご自身が福音を生きて、大切な戒めを実践し、すべてのことを主の栄光のために成し遂げられたお方でした。そんな方の愛を私た

ちが受けたからこそ、この方の模範に倣って、私たちがこの方のことばに忠実に従っていこうとするのです。

これから見ていく四つ目の柱も、容易なものではありません。四つ目の柱は、「大宣教命令に生きる」ということです。人々の間でキリストの福音を宣べ伝えて、「すべての人は救い主を必要としている罪人である」ということを訴え続けるのは、当然いろんな犠牲や大変さを伴います。では、いろんな大変さを味わうから私たちはやめてしまうのでしょうか？いいえ、それでも私たちはイエス様を愛しているからこそ、自分の考えや思いではなく、この方の教えを正しく知って、この方に喜んで従っていこうとするのです。かつて中国で活躍した宣教師のひとり、ハドソン・テラーも、こんなことばを残していました。彼はよく自分も宣教師になりたいと志願する人と面接をすることがありましたが、ある日の志願者に対してこんなふう尋ねました。「どうして外国で宣教師になりたいのですか？」、この問いにひとりの志願者はこう答えました。「キリストが『全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい』(マルコ16:15)と命じているからです。」と。また別の志願者はこう答えました。「キリストなしに、今も何百万人ものが滅んでいっているからです。」と。すると、ハドソン・テラーはこのように答えたのです。「それらの動機は素晴らしいものですが、試練や困難、苦難、そして死の危機に直面したとき、あなたを支えることはできません。ただ一つ、どんな試練の中でもあなたを支え続ける動機があります。それこそ、キリストの愛です。」と。キリストに対する愛の応答として、私たちは主の栄光を現そうとし、私たちは福音に生きようとし、私たちは大切な戒めに生きようとし、

#### ○四つ目の柱：大宣教命令に生きるとは

そして最後にもう一つ、私たちは大宣教命令を生きていこうとするのです。では、それがどのようなものなのかを、マタイの福音書28章から学びます。28章には、天に上るイエス様が地上に残される弟子たちに託した重大な務めが記されています。その教え、命令というものを、きょうは大きく分けて三つ、「土台」、「内容」、「約束」から考えてみましょう。では、いつものとおりにことばをお読みしますのでよく見てください。流れを押さえるために16-20節までをお読みします。

#### マタイ28:16-20

「:16 しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。:17 そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。:18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

#### 1. 命令の土台：キリストの権威 18節

さて、まず大宣教命令の土台から考えてみましょう。この命令を支えている土台、それは「キリストの権威」でした。イエス様はこのように弟子たちに言われていました。18節から「:18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。:19: それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」と。読んでいて気づいたと思いますが、死からよみがえって弟子たちの前に現れたイエス様が真っ先に発したことばは、命令ではありませんでした。イエス様は、「皆さん、あなたがたが守り行うべき命令は、これです。自分たちの力や知恵に頼ってやっていきなさい。」とは言われませんでした。その代わりに、まずイエス様は、その命令を果たす上で必要となる土台を明白にされました。その土台こそ、イエス様には、「天においても、地においても、いっさいの権威が与えられて」いるということでした。ここで「権威」と訳されていることばには、もともと「自由に選択できる権利」とか「自分の望むままを行うことのできる力」という意味が含まれていました。つまりイエス様が言わんとしたことは、「天においても、地上においても、要する

にあらゆる場所、あらゆることにおいて、わたし自身は、わたしの意のままにすべてのことをなすことができる、その力を、その権威を持っているのだ」ということです。確かにイエス様は罪人のために十字架にかけて死なれました。そして死んだ後、墓に葬られました。しかしそれで終わりではなく、約束されていたとおりに3日目に墓からよみがえられたお方でした。その復活を通してイエス様は、ご自身が死や罪にさえ支配されることのない、偉大な力を持ったまことの神であることを、まことの主権者であることを明らかにされたわけです。

ピリピ2：9-11でも、はっきりとこう言われていました。「9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」と。皆さん、これが、私たちがすべてのことをゆだねることのできるイエス様の姿でした。力のない、か弱いお方ではありません。この方は、サタンや悪霊に対してでも、地上の人々や国家に対してでも、また死に対してでも、それらにまさる圧倒的な権威を持っておられるお方でした。私たちが日常の生活で出くわす一つ一つのこと、この主の御手のうちから外れているものは何もありません。私たちににとっては突然の驚きであることも、この方はすべてをあらかじめご存じです。私たちににとっては手に負えない一つ一つのこと、この主はすべてを思いのままにすることのできるお方なのです。「大宣教命令」というのは、このような主の主、王の王、すべての権威にまさる権威を持っておられるお方によって支えられているものでした。

そして、この方のこの権威を覚えるのであれば、この揺るがない土台に支えられていることを覚えるのであれば、私たちは命令を実践する前に、少なくとも二つのことに心を留めることができます。

まず一つは、「私たちが命令を実践していくための力と励ましは、いつもこのキリストのうちにあ

る」ということです。これから私たちは「大宣教命令」を見ていきますが、その命令を果たしていくための力も、励ましも、慰めも、支えも、そのすべてはこのキリストのうちにあるということです。少し考えてみてください。今、私たちはマタイ28：16から読みました。イエス様はこの場において、ご自分が去った後に果たしていくべき大切な務めを弟子たちに託されました。では、託された弟子たちはどんな人たちでしたか？たとえば、ペテロはどうでしょう。ペテロは軽率で失敗を繰り返し、三度もイエス様を知らないと否定したような人物でした。ヨハネはどうですか？天から火を降らせて町を滅ぼしてしまいませんかと口にしたような、怒りっぽい人物でした。トマスはどうでしょう。彼は、「手に釘の跡を見て、手をその脇に差し入れてみなければ、私は信じません」といったような疑い深い人物でした。私たちが何か重要な頼み事を任せるとしたら、このような人物には頼まないかもしれません。でも、イエス様は、そのような過ちを犯しやすい、弱い者たちを選ばれました。彼らは、何の問題もない完璧な人たちではありません。地上を去った後、主のあかしを立てていくという重大な務めを任された者たちは、いろいろな点において足りていない、罪深い者たちでした。そして、そのような者たちをほかのだれでもない主ご自身が大いに用いられたわけです。

だからこそ、忘れてはいけません。主の命令をそれぞれが果たしていくことができるのは、私たち自身の知恵や力によるものではありません。どんなときにも揺るがない己の強さでもなければ、責任をやり通すための私たちが持つ固い意志でもありません。私たちはただ、私たちの弱さのうちに働いてくださる主の力が偉大であるからこそ、ただそれゆえに、主の務めを果たしていくことができるのです。あのパウロも、Iコリント15：10でまさにこう言いました。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と。

私たちが主のために福音を熱心に伝えていこうとするなら、もちろんそこにはいろんな難しさやチャレンジがあります。私たちはよくこう思ってしまう。「口下手な私のような者が語ったとしても、

うまく伝えられずに失敗したらどうしよう。」とか「相手が耳を傾けてくれなくて、私を変な人だと拒絶されたらどうしよう。」とか「語ることによって関係が壊れたらどうしよう。」また「この人はかたくなに心を閉ざしてしまっているから、どれだけ語ったとしてももう無理なんじゃないか。」と。こうして私たちは、人に対する恐れや不安が主のあかしを立てる時の妨げになってしまったり、諦めの思いにつながってしまうこともこれまでもあったでしょう。でも、そんな時こそ、私たちは思い出すことができます。天においても、地においても、私たちの愛する主イエス様にはいっさいの権威が与えられているのだと。私たちには不可能に思えるようなことも、この主にとっては不可能ではありませんでした。私たちはいろんな面で足りていません。でもそんな足りていない私たちを用いることのできる圧倒的な力が、この主にはあるのです。このような揺るがないキリストの権威が私たちを支えてくださっているのなら、私たちは何も恐れることなく、この主に希望を見出し続けることができるのです。イエス様も弟子たちを励ましてこのように言われています。ヨハネ 16 : 33 に「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」と。命令を果たしていくそのとき、私たちはいつも私たちにとって十分な力や励ましをキリストのうちに見出すことができました。

でもそれだけではありません。もう一つ覚えておくべきことがあります。それは、「私たちがこの命令に従っていく責任を負っている」ということです。「大宣教命令」というのは、そこら辺にいた何の力も持たない者が与えた、ランダムな務めではありません。この世界のすべて、私たちの歩みの一歩一歩も含めた何もかもを支配されているその主が、その王が、それぞれに命令を与えているのです。この後、実際にその命令の中身も見ていきますが、その際に、主が私たちに、「それをしていいですか？ それをしたくないですか？」と尋ねておられるのでも、「これが、あなたたちが取ることのできる選択肢の一つですよ」と提案しておられるのでもありません。主権者であるイエス様は、年齢も関係なく、ご自分に従ってくるひとりひとり、すべての者に対して、この命令に忠実であり続けることを求めておられました。偉大な主の助けに拠り頼みながら、ひとりひとりが実際にそれを生きていくことが求められていたのです。私たちがこの命令の土台に目を向けるとき、私たちは最も必要な励ましや助け、力を見出すことができます。しかし私たちがこの命令の土台に目を向けるとき、私たちに問われるのは、私たちの従順さでした。では、私たちはこの土台を覚えて、実際に何をしていくのでしょうか？

## 2. 命令の内容：弟子をつくること 19-20 a 節

次に、大宣教命令の内容を考えてみましょう。内容、それは簡潔に「弟子をつくること」でした。土台について述べられたイエス様が、続けてその命令の中身を語られました。19 節からこのように書かれています。「19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るよう、彼らを教えなさい。」と。この箇所は数多くのことを私たちに教えてくれますが、まず何よりも注目してほしいのは、「あらゆる国の人々を弟子としなさい。」というこの命令です。ご存じの方も多いかも知れませんが、この 19、20 節の中で動詞として用いられていたものは唯一、この「弟子としなさい」ということばだけでした。そのほかの「行って」、「バプテスマを授け」、「教えなさい」ということばも、一見すると動詞のように見えますが、これらはすべて「弟子としなさい」ということばを修飾している分詞でした。言い換えると、この三つのことばは、「弟子をつくる」ということが具体的にどのようにしてなされていくのかに説明を加えるものでした。いずれにせよ、イエス様が求めておられたことは非常にシンプルでした。弟子たちがさらに弟子をつくっていくこと、それがすべての信仰者に対して、教会に対して与えられた大命令だったのです。

では、立ち止まって考えてみましょう。イエス様は私たち全員に対して「弟子をつくりなさい」と言われました。この「弟子をつくる」とはそもそもどういう意味でしょう。何をしていくことを望んでお

られるのでしょうか。実際「弟子づくり」や「弟子訓練」ということばを聞くと、人々の間にはいろんな考えがあります。「弟子訓練、弟子づくりとは、外に出て行って福音を伝えることです。救いを知らない人に対して救い主について語ること、それが弟子づくりの中心です。」と言う人たちもあれば、「弟子づくりというのは、信仰者たちが集まり、時間をとって聖書をともに学ぶことです。兄弟姉妹と一緒に集まり、本やテキストを使って勉強すること、知識を蓄えていくこと、それが弟子訓練です。」と言う人たちもいます。もちろん、どちらも間違っていないです。でも、果たしてイエス様が「あらゆる国の人々を弟子としなさい」と言われた時、いったい何を意味していたのでしょうか？

鍵となるのは、「弟子」ということばが持っている意味です。「弟子」ということばには、もともと「先生や師の教えを学び、その教えに従おうとする者」という意味がありました。私たちもいろんなところで聞いたことがあると思います。つまり、このことばは、先生から受ける教えを単に知識として蓄えるものではありません。もうその教えを歩んでいる先生に倣って、その後を実際に生きていこうとする人物のことを表していました。ウォーレン・ワーズビーというひとりの先生も、「弟子」ということについて次のように説明しています。「『弟子』という言葉は、初期の信者にとって最も一般的な呼び名でした。弟子であることは、単なる改宗者や教会の一員であること以上の意味を持っていました。見習いという言葉が、それに相当するかもしれません。弟子は師につき従い、師と一つとなり、師から学び、師と共に生活しました。ただ聞くだけでなく、実践を通して学んだのです。」……ということは、「弟子づくり」とは、単に伝道して、救い主であり主であるイエス様のもとに人々を導くこと、だけではありません。また、イエス様に関する知識を身につけさせるだけ、でもありません。「弟子づくり」とは、人が主であり、師であるイエス様につながって、そのイエス様を愛して喜んで従って、イエス様に似た者へと変わっていくことを助けることでした。イエス様につながるために、私たちは福音を語ります。その者がイエス様を愛して、その者がイエス様に喜んで従って、その者がイエス様に似た者へと変わっていく、そのために私たちはみことばを語るのです。「弟子訓練」というのは、何らかのプログラムではありません。ましてや、牧会している牧師や教会のリーダーたちだけの働きでもありません。救われた者は、自分もイエス様に似た者になりたいと歩んでいるその道の過程にあって、同じようにして歩もうとする者たちのことを助けようと、手を差し伸べようとするわけです。私たちはみな、そのような弟子訓練をあらゆる国の人々に行っていく責任を負っているということです。

これを聞いて、「では、もっと具体的に私たちは日々の生活の中でどのようにして弟子づくりを行っていくことができるのだろうか？」と思う人もあるでしょう。先ほども言いましたが、イエス様はその説明を残りの三つの分詞をもって教えてくださいました。説明を足してくださいました。

### 1) 行くこと

イエス様がまず一つ目に言われていたのは「行くこと」でした。「弟子訓練」というのは、言い換えれば、人々がやって来るのを待つのではなく、みずから出て行って弟子をつくる必要がありました。私たち自身が、最初の一步を踏み出すのです。当然、出ていく場所は人それぞれ違っています。教会のある人たちは、まだイエス様を知らない人が数多くいる別の国へと出て行こうとします。宣教師として神様に遣わされたその場所で、救い主のすばらしさを語り続けようとするわけです。覚えていますか？以前、教会に来てくださった富岡先生のご一家も、バングラデシュという国で働かれている宣教師のひとりでした。また、ある人たちは海外には行かずとも、自分たちが置かれている場所で福音を宣べ伝えようとしています。それは、自分の置かれた職場かもしれません。学校かもしれません。教会かもしれませんし、自分の家族や友人、近所の人に対してかもしれません。たとえそれがどんな場所であろうとも、どんな相手であったとしても、主を心から愛している私たちは、遣わされていくその場所にあって、主の愛を語り、主の弟子をつくっていかうとするのです。

一つ言えるのは、皆さんひとりひとりが置かれているその場所、その状況は、決して偶然ではないということです。こんなふう考えたことはありませんか？「神様はどうしてこんなに困難な状況に私を置かれるのだろう。」とか「どうしてこんなにも愛するのが難しい人と毎日接しないといけないのだろう。」また「環境が良くなりさえすれば、私はもっと主のために働くことができるのに……。」と。でも、覚えておかないといけないことがあります。それは、神様が置いているその状況は、天と地、すべてにおいて権威を持っておられるその主が良しとしてあなたに与えたものだ、ということです。主が良しとしてそこに私たちを置いているということです。そして、その場において、その人の前で、主のあかしを立てることができるのは、ほかのだれでもない、あなただということです。私が知らない人に対して、皆さんは伝えていくことができます。皆さんが知らないような人たちに対して、私も伝えていくことができます。だから、どんな場所にあったとしても、私たち自身がみずから進んで、行くことが大切でした。「弟子づくり」は、それぞれがその最初の一步を踏み出す、犠牲と、そしてその人たちを愛する愛が求められるものだったのです。

## 2) バプテスマを授けること

二つ目にイエス様が言われていたのは「バプテスマを授けること」でした。出て行って福音を宣べ伝えるだけではなく、それを信じ受け入れた者に対し、「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け」ることが求められていました。もちろん皆さんもご存じのとおり、このバプテスマ自体に罪人を救う力などありません。どんな行いも人に救いをもたらすことはないのです。でも、恵みによってキリストを信じる信仰によって救われた者は、かつての生き方に対して、自分はもうすでに死んでいるのだということ、そして今はキリストとともに生きていくのだということ、バプテスマを通して公の場であかしするのです。これは別に、今始まったわけではありません。初代教会の時代から、クリスチャンたちはずっとそのようにして生きてきました。教会が誕生したあのペンテコステの日、ペテロからメッセージを聞いて、心を打たれたイスラエルの人たちは何をしていたか、覚えていますか？そのことは使徒2：37-38にこう記しています。「：37 人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか」と言った。：38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」と。彼らはそのことばを聞いて、続く41節にも「そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。」と書いていました。昔も今も何ら変わっていません。バプテスマは、救い主を信じて、主を愛する者たちが最初にとることのできる、愛と従順の応答でした。弟子づくりには、そんなバプテスマを授けることも欠かせなかったのです。

## 3) 教えること

そしてもう一つ、三つ目に言われていたことは「教えること」でした。福音を語り、救われた者にバプテスマを授けるだけではありません。加えて、私たちはキリストとともに新しい歩みを始めた者に対しても、そのキリストをますます知って、キリストに似た者へと成長できるようにと教えていくことも欠かせないことだったのです。ただし、気をつけてほしいことがあります。もう一度20節をよく見ると、イエス様はここで何と言われていましたか？単純に「わたしが命じておいたすべてのことを教えなさい。」とは言われていませんでした。その代わりに「命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」と言われたのです。この「守るように」と訳されていることばには「注意や関心を払う」とか「従順に従う」という意味が含まれていました。つまり主が求めていたことは、どれだけの知識を蓄えるかではありません。聞かれたときにどれだけみなを納得させることができる模範解答ができるかでもありません。私たちが教えるそのとき、その人がますます主に心を向けて、主を愛し、主が命じておられることすべてに従順に従っていくように、と教えて励まし合っていくわけです。当たり前聞こえ

るかもしれません。でも皆さん、弟子づくりというのは、自分たちの師につながって、その師の足跡に倣う者をつくるのであって、私たちが自分の弟子をつくるわけではありません。だからこそ、私たちは自分の考えや価値観ではなくて、みことば全体が教えているキリストの姿に目を留めて、そのキリストに倣う者として歩むようにと、互いに教え合う必要があったわけです。パウロが持っていた目標も、まさにこれと同じでした。パウロもこの目標のために、一生懸命に仕えていたのです。コロサイ 1 : 28 にこのように書いていました。「:28 私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」と。聞きましたか？最後の部分。パウロは「すべての人を、パウロにある成人として立たせるためです。」とは言いませんでした。「すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです」と言ったのです。だから、キリストを宣べ伝えました。皆さん、私たちがお互いに交わりを持つとき、私たちがお互いに教え合うとき、私たちの焦点をどこに置くのでしょうか？お互いがキリストに似た者になりたいから、人々の目をキリストに向けさせようとするわけです。それが弟子訓練でした。

改めて考えてみてください。果たして、私たちはキリストを愛している者として、「弟子づくり」という務めを喜んで、励んでいるのでしょうか？救い主を知らない人に対して、「キリストのうちにこそ、罪の赦しがある」ということを、伝えたいと願っているのでしょうか？その願いがますます大きくなっているのでしょうか？自分がキリストに似た者となることを目指してだけでなく、兄弟姉妹も同じようにして成熟した者となっていく、その助けになりたいと願っているのでしょうか？確実に言えるのは、信仰者ひとりひとりの歩みにとって、この「弟子をつくる」というのは、補足的なものではないということです。「行って」、「バプテスマを授け」、「教える」とのは、主の弟子として歩んでいる者であれば必ず求められる、忠実な歩みには決して欠かすことのできない大切なイエス様からの務めでした。

### 3. 命令と約束：主ご自身がともにいてくださる 20b 節

さて、最後にもう一つだけ「約束」を考えてみましょう。弟子たちに大きな務めを託された後、イエス様はこのようにことばで締めくくられました。20 節にこう書かれています。「…見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と。イエス様が残された約束、それは「主ご自身がともにいてくださる」ということでした。私たちが持っている日本語の訳ではなかなか読み取ることができませんけれども、この箇所をそのまま訳せば、ここは「わたしが、わたし自身が、世の終わりまでともにいます。」ということが出来ます。この世を去って天に上る前に、主は最後の最後まで弟子たちとともにいるご自分がどんな存在なのかを強調しておられたのです。想像してみてください。3 年間ずっと一緒にいたイエス様が、自分たちのもとを離れていなくなってしまう。弟子たちは当然、寂しさや悲しみを覚えたでしょう。それだけではなく、今まさにイエス様から託された務めや教えを、自分たちだけで実践していくことは容易なことではないと思ったことでしょう。しかし、そんな彼らに向かってイエス様は言われるのです。「弟子たちよ、心配しなくていい。世の終わりまで、ほかのだれでもない、わたしが、わたし自身が、あなたがたとともにいます。」と。主が去っていかれた後、彼らは取り残されて孤独になるわけではありませんでした。天においても、地においても、すべての権威を持っておられる主が、すべてのことを思いのままに成すことのできるその主が、いつまでも離れずにとともにいるのだと約束されたのです。どれだけ彼らは励まされたでしょう。どれだけ彼らは慰められたでしょう。どんな時もずっとともにいてくださったその主が、そばで支えてくださるのだ、というこの事実は、どんなに大きな安心や喜びをもたらしたでしょう。いや、彼らだけでなく、ほかの信仰者たちにとっても、この事実は大きな力を与え続けてきました。

死の直前にパウロが最後に記した手紙、Ⅱテモテの最後の 4 章を開いてください。言わずもがな、パウロは神様や人を心から愛して、教会のために喜んで仕え続けた人物でした。救われてキリストのすばらしさを知った後、彼は文字どおり犠牲を払って、その生涯を神様にささげ続けたのです。神様をいつ

も心から愛し、人々を心から愛して仕え続けたそのような人物は、人々に囲まれて、すばらしい最期を迎えたのでしょうか。どう思いますか？悲しいことにそうではありませんでした。そんな彼の晩年は、とても孤独なものだったのです。彼とともに働いてきた多くの同労者たちは、彼を見捨てて立ち去っていきました。そんな状況の中であって、パウロはこんなことばを口にしました。Ⅱテモテ4：16-17に「：16 私の最初の弁明の際には、私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。どうか、彼らがそのためにさばかれることのありませんように。：17 しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。」と書いています。パウロが周りの状況だけを見て、がっかりしてもおかしくなかったでしょう。頑張ってきたのにと、失望してもおかしくはなかったでしょう。しかし、そんな彼をいつまでも励まし続けたものがありました、それが、イエス・キリストだったのです。イエス・キリストこそ、パウロの心を支え続けていた慰めの源でした。

そして、これは、私たちにとっても同じです。主が私たちに託してくださった務め、この地上で果たしていくべきその責任は、簡単なものではありません。いろいろな難しさや戦いを味わって、自分にはできない、もう無理だと思うような場面がこれから先も数多くあるでしょう。主の働きに忠実であろうとすればするほど、それを妨げようとするような迫害に出くわすかもしれません。でも、たとえどんな困難に直面したとしても、私たちは慰めや力を見出すことができます。それは私たちのうちではありません。私たちといつまでもともにいてくださるその主のうちです。もし、私たちの力や知恵によってこの「大宣教命令」に従っていかなければならなかったとしたら、私たちには何の希望もありませんでした。でも、偉大な主がいつもともにいてくださるのであれば、すべての権威を持っておられるそのお方がともにいてくださるのであれば、私たちはたとえどんな時にあったとしても、主のために生きていくのに十分な力と助けを持っているわけです。皆さんが置かれているその状況は、神様からあなたのために与えられているものでした。年齢はもう関係ありません。その年齢さえも、神様が与えてくださっているものでした。そして、その中において、皆さんひとりひとりが神様のために歩いていくための力と励ましは、神様が与えてくださっているものでした。いつもともにいてくださるお方がおられるのです。私たちにとって十分な励ましを、十分な助けを、十分な支えを与えてくださるお方がともに居続けてくださるのです。そうすると、私たちの語彙の中に「私にはできません」というものはない、ということになります。もしそれを言うなら、それは、私たちとともにいてくださるお方を否定することになります。ヘブルの著者も信仰者の歩みについてこのように述べています。ヘブル13：5-6に「：5 …主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」：6 そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましよう。」と書いています。

皆さん、私たちの周りには、今もなお主を知らない人たちがあふれています。キリストに似た者として成長していく、その歩みを終えた信仰者も、クリスチャンも、ひとりとしていません。私たちは今、主から託された大きな務めを持っているということです。そうだとしたら、私たちの責任は、主の命令に最後まで忠実であり続けることでした。私も含めて、皆さんひとりひとりも、簡単ではありません。でも、私たちが主を愛しているから、その主の命令に従っていきようとするのです。アフリカで働きをしていたひとりの宣教師はある時、「この仕事が本当に好きなのですか？」と尋ねられたことがありました。彼はその時に、このように答えたのです。「いいえ。妻も私も、汚いのは嫌いです。やぎの糞が散乱している小屋に入るのも好きではありません。しかし、好きか嫌いかは関係ないのです。私たちは『行け』という命令を受けているから行くのです。愛が、私たちを駆り立てるのです。」と。私たちも同じです。私たちのような者に対して、いっさい恵みも愛も値しない、そのような者に対して、主がまず私たちのところに来てくださって、主がまず私たちに愛を示してくださいました。その主のために、喜んでみことばに従って、主の栄光を現して、福音に堅く立って、神様と隣人を愛しながら、何よりも



このすばらしいキリストを宣べ伝えていく——ひとりひとりがそんな信仰者として、また教会として、  
ともに成長し続けていきましょう。